

中学生記者、文化財取材!

昨年実施された「第56回小中学生記者の文化財取材コンクール」で入賞した2名の中学生に、今春の京都非公開文化財特別公開にて公開される「今戒光明寺 山門」(京都市左京区黒谷)を一足早く訪ねて取材し、記事を作成してもらいました。それぞれの視点で「今戒光明寺 山門」について解説してありますので、是非拝観の前にご一読下さい。



今戒光明寺 山門

今戒光明寺の山門での発見と学び

京都教育大学附属桃山中学校

岡 宝

私は非公開文化財である今戒光明寺の山門を見学した。今戒光明寺は螺髪が特徴である阿弥陀仏がいらつしやるところだ。普通、螺髪は巻き貝のようなだが、今戒光明寺の阿弥陀仏は非常に大きな頭髪になっている。

この山門は今戒光明寺の入口にあたる場所だ。山門の上のぼると、天気の良い日にはあべのハルカスが見えるほど見はらしが良い。山門の中にはお釈迦様と十六人のお坊様の像があった。それぞれの像は文殊菩薩・普賢菩薩・宝冠釈迦如来とい、左右の菩薩様は青い獅子・白い象に乗っていた。この三人の内、文殊菩薩は「三

人よれば文殊の知恵」ということわざのもとになっている。お釈迦様の頭は普通螺髪であるものの、冠をかぶって髪を結っているというめずらしい姿であった。横の十六人のお坊様はお釈迦様達と一緒に修行をしたそうだ。この十六人のお坊様の名前は、インドの名前がもとなっている。

次に山門の天井に描かれていた龍について。この絵は「蟠龍ぼんりゅう図」といい、幕末に中殿暁園という人が描いた。この龍の絵には次のような意味があるそうだ。この龍は火を消してくれる、防火の役割を果たしていたのではないかとわ

る。また金戒光明寺では龍の絵で

ある。

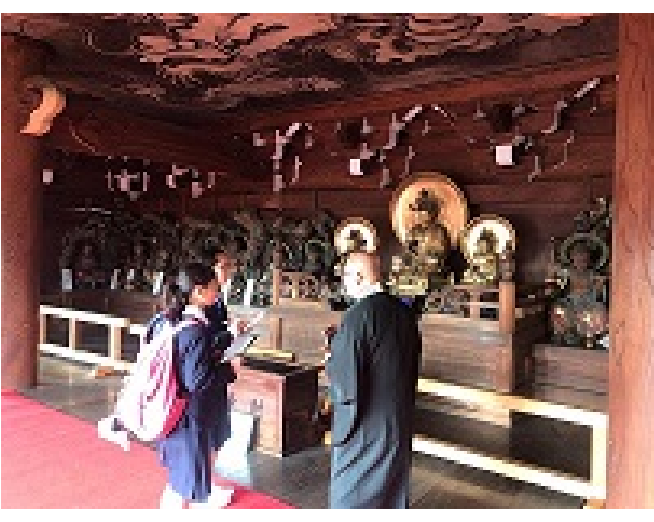
その中で私達ができること、それは文化財に触れ、自分なりに文化財とは何かを考えてみるのだと思う。きっとその答えから、自分のことができることが生まれるだろう。実際に事業や取り組みに参加するのもよいし、文化財の重要性を次の世代に話し伝えるのも良いことだろう。自分達も守り伝える意識を持つことで、美しい文化財の裏側で支える人々の一員になれるのではないだろうか。

(取材中の様子)



あったが、他の寺社でも水にまつわるものが描かれていることが多いそうだ。今回、一つ疑問に思ったことがある。それは、なぜこの場所に建てたのかということだ。今戒光明寺は山に囲まれているのではなく町の中にある。いろいろ不便ではないだろうか。お寺の方にかがったところ答えはこうだ。今戒光明寺の山門から東西南北すべてが見わたせる。そのため敵がせめてきたときでもすぐに見つけることができる。しかも、どこへでも行きやすいところだったのだ。

私は今回初めて今戒光明寺の山門に登ることができた。そこから、たくさんの歴史を学ぶことができ、今と昔の考え方の違いを発見することができた。この山門に入ることはいつもできることではないことから、とても貴重な体験となった。次は今戒光明寺の本堂や阿弥陀仏などについて再び訪れ、詳しく調べてみたいと思う。そして、今戒光明寺についての「マスター」のようになれば良いと思う。



(取材中の様子)

『文化財』の裏側には……

京都教育大学附属桃山中学校学校

勢子 杏樹

麗らかな陽差しが春を感じさせる、三月十五日。私達は今戒光明寺を訪れていた。その目的は、この春公開される府指定文化財である山門。執事の方の案内のもと、山門、さらにその二層部分の内部へと向かった。

建物内に入ると、傾き四十五度程もある

急な階段に、漂う古くやさしい木のおおりの。その一つひとつから、この建物の古さを感じられる。お寺の方々が三方向にある大きなとびらを開けてくださった。光が差し込み、一気に明るくなる。その先には、天井一面に描かれた蟠龍(ぼんりゅう)、そしてこの山門に祀られている、「宝冠釈迦如来像」や「普賢菩薩像」、「文殊菩薩像」

に十六羅漢の仏像たち。その仏像たちもさることながら、廊下から見える景色も絶景であった。天気さえ良ければ、あべのハルカスをも見ることができそう。墨跡生々しい龍と今も輝きを放つ仏像たちの姿。だが、その美しい空間の裏側には多くの人々の協力と熱い思いがあった。

まずは、古文化保存協会の方々。文化財の保全事業はもろろんのこと、一般の方へ文化財の魅力を伝える取り組みも行っている。私も昨年参加した小中学生記者の文化財取材コンクールもその一つである。小さな子どもたちからお年寄りまで、国内からか世界の国々へ、たくさんの人々に日本の文化財の重要性と歴史芸術的な価値